

【今日の説教から】

感動的な奇跡の出来事と共に弟子たちへの主のご愛あふれる、牧歌的な湖畔の出来事が書き表されています。

まさにルカ5章のペテロらへのイエス様からの働きかけ、語り掛けの再来です。

あの時、イエス様は不漁に悩むペテロに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われ、ペテロは「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましょう」と言いました。こうして主の言葉に聞き従った時、

「そしてそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れがはいって、網が破れそうになつた。」と記してありました。ペテロは絶対起こりもしないことを引き起こす方を前に、疑つた自分を恥じて「これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、『主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です』」と語ると、主は「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」と語られました。「そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。」とありました。

今回も「一切を捨ててイエス様に従う」というレッスンが与えられました。もはや恐れることはない。力なく涙し、嘆くことも、失望することもない。イエス様は全てを統御しておられるお方なのです。この方に導かれる人は幸いです。私たちも主への導き手として用いられたいと願います。

皆様おはようございます。

イエス様のご復活後の出来事を読み進めております。

自然あふれるガリラヤ湖の湖畔に立ち、弟子たちの様子をつぶさにご覧になられ、声をかけ、奇跡を起こされ、食べ物を用意され、また弟子として主が召された初めの感動の出来事を鮮明に思い出させ、そしてご自分に従うようにと使命の道に導かれた感動の箇所をご一緒に読み進めてまいりましょう。

部隊はガリラヤ湖ですが、ここでいろいろなことが起こりました。ルカ5章の大漁の奇跡に始まり、嵐が嵐に変えられたり、湖の上を歩かれる主の出来事などがありました。

その、主の教えに満ちている湖が再び今日の舞台です。

21:1 そのち、イエスはテベリヤの海べで、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。

21:2 シモン・ペテロが、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にいた時のことである。

21:3 シモン・ペテロは彼らに「わたしは漁に行くのだ」と言うと、彼らは「わたしたちも

一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って舟に乗った。しかし、その夜はなんの獲物もなかった。

イエス様に弟子として従うようになってから、彼らは漁をすることはあったのでしょうか。主と共に進むとき、多くの聴衆が、支援者が主とその一行を喜んでもてなし、時には実際に魚の口から支払うべき税金が与えられたとの記事もありました(マタイ17章)。

再び漁に出るという事。それがすなわち彼らの信仰がすたれたとか、弟子としての在り方や責任を投げ捨てて漁師に戻ろうとしていたとか、そういう事ではないと思います。しかし彼らにはまたもそうする経済的な必要が起つたのかもしれません。

彼らの慣れ親しんだ夜の漁。漁火漁です。生き物の習性を利用した、火を焚いて魚をおびき寄せて取る漁の方法がとられたのでしょう。ルカ5章でも彼らは夜の漁に出していました。

一晩中奮闘しても何の成果もない。何という徒労、何という空虚な気持ちなのでしょうか。この空っぽの船。イエス様がおられない、イエス様がおられた時のように群衆を引き付けることが出来ない、かつての仕事をしようとしても、腕がなまつたのか上手くいかない、ああ寂しいという彼らの心をこの船は表しているようです。

21:4 夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。

夜が明けたころ。イエス様は岸に立っておられました。しかし弟子たちはそこに主がおられ、彼らの奮闘をつぶさに見守っておられたことには気付いてはいませんでした。

21:5 イエスは彼らに言われた、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありません」と答えた。

「子たちよ、魚を全く取ることが出来なかつたみたいだね」そうイエス様はおっしゃいました。

子たちよ。温かい語り掛けです。

子たちよ。

この復活の出来事では、主がそこにおられるのにそれに気づいてはいなかつたという出来事が何回も記されてありましたね。現在に生きる私たちもそういうことが良くあるのだと思います。見ずに信じる者は幸いです。私たちが見ていなくても、主は私たちを見ておられるのです。

親が、子に気づかれないようにそっと遠くから見守っているように。物の陰に隠れて、子供は決して気付かないのだけれど、親はじっと見守っている。そういうことが良くありますよね。一心不乱に遊んでいる姿。美味しそうに食べている姿。転んで泣いている姿。うまくいかなくて拗ねている姿。何かにかんかんに怒っている姿。姿を現して、そうして直接慰めてもいいのです。しかし時には独り立ちさせるために一人で、自分の力で立ち直ったり、悟つたりすることも必要なのです。でも隠れてじっと見ておられるのです。私たちが気付かないだけで、主は私たちと共にずっといつも共にいてくださるのです。今も、あなたのすぐ後ろに立っておられるのかもしれませんのです。

「子たちよ、魚を全く取ることが出来なかったみたいだね」
切ないその気持ち、挫折感、役に立たないという思い、そういう気持ちを痛いほど主は受け止めてくださり、優しく語り掛けられるのです。

21:6 すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう」。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。

21:7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとって海にとびこんだ。

不漁の時に、漁火漁をしたところで駄目だったのに、白々と夜が明けて、今になって船の右だろうと左だろうと、網を下ろそうと、駄目なものはダメなのです。もうだめだと彼らが判断を下すには、もう今日はダメだったと結論を下すのには、それなりの理由があるのです。しかし主の言葉は彼らの判断には反していました。主のお言葉に従った彼らに、神様の摂理が働きました。

まさしくルカ5章の再来です。あの出来事は、彼らが網を捨ててイエス様に従った出来事でした。

5:1 さて、群衆が神の言を聞こうとして押し寄せてきたとき、イエスはゲネサレ湖畔に立ておられたが、

5:2 そこに二そうの小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。

5:3 その一そうはシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお教えになった。

5:4 話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。

5:5 シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんで

した。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましょう」。

5:6 そしてそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れがはいって、網が破れそうになつた。

5:7 そこで、もう一そな舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになつた。

5:8 これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」。

5:9 彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびただしいのに驚いたからである。

5:10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言わされた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。

5:11 そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従つた。

ああ、そんなことも忘れていたのか。このお方は、自然の法則をも変えることのできるお方、こうあるはずがないと人間が百パーセント決めつけたことをひっくり返すお方。力ある神様の力をお持ちのお方。罪深いこの私とは全き比較できない、清い、力強い、お優しいお方。養育し、導いてくださるお方。このお方がおられるのなら、この方が私たちの面倒を見て、導き養ってくださるので、私たちは何をも捨ててこの方と共にいたい。この方のことを知りたい。この方がなさることをかたずをのんでみたい。そうして彼らは網を捨てて主に従つたのでした。それからというもの、彼らを失望させることはなく、必要が満たされ、導きが与えられました。

しかし、彼らはその時の感動を忘れ、孤軍奮闘、自分たちの力だけでこの弟子の道を行かなければならぬような悲壮感に打ちのめされそうになっていました。

しかし主は彼らと共におられ、見つめておられ、時にかなつてふさわして御言葉を語り掛けられ、彼らの只中に主の奇跡の出来事を起こし、いつも再び彼らを喜ばせ、歓喜の声と共に主をあがめ、人間を取る漁師、人の命を神のもと、永遠の命へと導く光榮な務めへと導き続けてくださるのです。

21:8 しかし、ほかの弟子たちは舟に乗ったまま、魚のはいっている網を引きながら帰つて行つた。陸からはあまり遠くない五十間ほどの所にいたからである。

21:9 彼らが陸に上つて見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。

21:10 イエスは彼らに言わされた、「今とつた魚を少し持つてきなさい」。

21:11 シモン・ペテロが行って、網を陸へ引き上げると、百五十三びきの大きな魚でいっぱいになつていた。そんなに多かつたが、網はさけないでいた。

イエス様は弟子たちが食べるものを用意していてくださいました。主はそのように給仕する者として仕えてくださいました。弟子たちがとった魚は、ご自分が食べるためら所望されたのでしょうか。

21:14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

21:15 彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた。

21:16 またもう一度彼に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を飼いなさい」。

21:17 イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい」。

「私の羊を飼いなさい」この世界に生きる方々の世話をしなさいとの主のお言葉です。困難の中にあり、震え、おびえ、泣いている方々があります。主が仕えてくださったように、私たちもお仕えして、主と隣人に仕えるのです。

不吉な言葉も見逃すわけにはいきません。

21:18 よくよくあなたに言っておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」。

21:19 これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してから、「わたしに従ってきなさい」と言われた。

自分の生きたいところに行き、したいことをしたい、それは私たちの望みですが、しかし主はそのように生きることをせず、ゲッセマネでも父なる神様の御心を望まれたように、私たちもご尊敬する主イエス様に従う者でありたいのです。ほかのだれのためでもなく、組織のためでも誰かのためでもなく、主イエス様に従い、イエス様が仕えておられる困窮した

方々に仕えるのです。

主のお言葉に従うのなら、あの大量の奇跡のように人生のきらめく導きがあると信じます。主に感謝をおさげいたします。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。

主の弟子たちが過去に何を経験し、あふれる喜びと共にどのようにイエス様と共に人生を進むに至ったのかを教えて、失意の弟子たちを励まし、神様に対する信仰の心を奮起させてくださったのかを教えてください、ありがとうございます。この世界のすべてを司る神様が私たちを愛し、導き、特別な使命を与えていてくださいますことをありがとうございます。どうぞ今週も私たちをお導きください。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン

(NHK ウェブサイトより)質素な生活ぶりから「世界で一番貧しい大統領」とも呼ばれてきた南米ウルグアイのホセ・ムヒカ元大統領が13日、亡くなりました。89歳でした。

ムヒカ氏は1935年に貧しい家庭に生まれ、貧困や格差に矛盾を感じて20代のころから反政府ゲリラ組織に参加し、軍事政権の下で10年以上刑務所に収監されました。

ウルグアイが民主化した後、1990年代から左派の国会議員として活動し、2010年から5年間、大統領を務めました。

大統領在任中も農場での生活を続け、そのつましい生活ぶりから“世界一貧しい大統領”とも呼ばれ国民から親しまれてきたほか、大量消費社会を鋭く批判したスピーチは各国で翻

訳され、日本でも人気を集めました。

おととし行われた NHK のインタビューの中でムヒカ氏は、若い世代へのメッセージとして「今は多くの矛盾を抱えた不確実な過渡期の時代なのです。生きるための大義名分を見つけることが大切です。若い人は、これだということを何かひとつ持つのです」と語っていました。

ムヒカ氏は晩年はがんと闘病し、最近は緩和ケアを受けていると伝えられていました。

13 日、オルシ大統領が、ムヒカ氏の死去を SNS を通じて発表しました。